

「シン・ゴジラ」における地震学の存在の軽さ：
地震学の広報と南海トラフ地震に関連する情報

The Unbearable Lightness of Seismology in "Shin Godzilla": Toward the next Nankai Megaquake

○加藤 護

○Mamoru KATO

"Shin Godzilla" is a smash-hit movie which was released in July 2016. The 29th of Godzilla movie series focuses on how the government reacts to the unprecedented phenomena caused by Godzilla. While it is possible to do so, no seismologist appears in this Sci-Fi movie. This could be due to that the public is less aware of what seismology actually is. Role of seismologists would be huge in the next Nankai Megaquake, and we shall take different approaches in promoting seismology via outreach activities.

1. はじめに

【以下では映画の内容に触れるためにいわゆるネタバレが生じる】

映画「シン・ゴジラ」は2016年7月に公開された映画である。東宝製作のゴジラシリーズの第29策であり、その年の邦画興行成績の上位に位置するヒット作となった。この映画では首都圏に出現した新巨大生物に対する人々の対応が描かれている。特に政府の危機管理の詳細な描写も多くあり、この点から災害映画として評価する見方もある（例えば福和[2016]）。緊急事態への対応のリアリティについても多方面から検討されている（例えば石動[2017]）。

「シン・ゴジラ」には気象庁職員も登場する。危機管理初動で自然現象を観測する官庁が情報提供することは当然想定される。気象庁は地震観測も担当しておりこの映画で地震学が貢献する場面は当然あるべきだろうと（少なくとも地震学者である私は）考える。しかしこの映画に地震学の要素はほぼない。

本発表では映画「シン・ゴジラ」においてあり得た地震学の貢献を整理する。また地震学の要素の欠落の原因に関して私見を述べる。

2. 考えられる地震学の「貢献」

狭義の地震学は観測された地震波形を解析する学問であると定義される。地震波は自然地震以外の現象でも励起され自然地震以外を扱う研究をForensic Seismologyと総称することがある。日本でも人工的な地下爆発や地すべりなどの地震波形解析例が報告されている。大きな質量を持つ新生

物が海底や地表を移動する際には地震波を励起することが予想される。観測波形を解析して震源の情報を得ることができよう。例えば以下のような場面で地震学は貢献できただろう。

- 1) 東京湾の海底トンネルの崩落
- 2) 東京湾から新生物が上陸
- 3) 海への帰還から再上陸するまでの探索

3. 私見とまとめ

「シン・ゴジラ」にはそれが可能な場面であるにも関わらず地震学の要素が含まれていない。この理由は地震学がどのような分野であるか知られていないことにあると考えられないだろうか。地震学は何が起きたのかを正確に把握する観測科学としての面が大きい。ネットで地震情報の流通は活発になっているがその裏にある地震学の役割があまり意識されていないかもしれない。これは地震学会などのこれまでの広報は成功していないことを意味し、また次世代の地震学者をリクルートする障害ともなっているかもしれない。

地震予知・予測に対しは大きな関心が寄せられるが、現状その関心は根拠のない地震予測情報に向いている。社会が持つ「地震学」像と実像とが乖離していることで研究成果や地震情報の利活用が進まないならば例えば次の南海トラフ地震の際に情報が錯綜し混乱が生じる可能性がある。震災の広報と地震学の広報の違いを意識して、地震学のアウトリーチや広報は再検討する時期が来ているのではないだろうか。